

第3章

1992年～

助成事業の変遷と オックスフォード 保健福祉研修

地域保健福祉研究助成・ ボランティア活動助成を開始

1994年、「医学研究助成」の流れを汲み、現在実施している「地域保健福祉研究助成」がスタートした。それまでにはいくつかの変遷があった。

まず、1992年には、高齢者の在宅介護に関する在宅保健福祉研究およびボランティア活動を助成することを目的として「老人在宅福祉研究助成」および「サラリーマン(ウーマン)ボランティア活動助成」を開始した。

「老人在宅福祉研究助成」は2年間実施したのちに「医学研究助成」とともに「地域保健福祉研究助成」に統合された。このことにより「地域保健福祉研究助成」は、その対象が福祉医療、介護、健康増進まで拡大した。

一方、「サラリーマン(ウーマン)ボランティア活動助成」は、当財団としては初めてのボランティア活動に対する助成であった。

2001年には「サラリーマン(ウーマン)ボランティア活動助成」の助成対象を、在宅老人福祉だけではなく、高齢者福祉、障がい者福祉およびこどもの健全な心を育てるための交流ボランティアまで拡大した。

2007年、「サラリーマン(ウーマン)ボランティア活動助成」と同様のテーマを対象に、シニア(満60歳以上)の活動を支援する「シニアボランティア活動助成」を開始した。これはシニアの方々が、社会参加をすることで生き甲斐を見出し、イキイキと生活し、健康寿命の延伸につなげることも目的としている。

なお、「サラリーマン(ウーマン)ボランティア活動助成」は、2017年に「ビジネスパーソンボランティア活動助成」に名称変更している。

地域保健福祉研究助成の特色

民間助成財団は大学の教職員、大学院生の研究を主な対象としている場合が多いが、当財団では、公衆衛生の現場に従事する方を主な対象としている。

〈応募資格〉

- ◎保健所、地方衛生研究所等衛生関係機関に所属する職員
- ◎都道府県市町村の衛生および福祉関係職員
- ◎保健・医療・福祉の実務従事者

上記応募資格者による共同研究も可。大学病院の職員などは応募資格者に含む。ただし大学の教職員や大学院生の単独研究または主研究者となる研究は不可。また、前年度に当財団の助成を受けた人は不可（共同研究者は可）。

〈対象となる研究テーマ〉

- (1) 地域保健および地域福祉に関する研究
- (2) 在宅・施設の医療、福祉および介護に関する研究
- (3) その他住民の健康増進に役立つ研究

ボランティア活動助成の特色

シニアおよびビジネスパーソンのボランティア活動を支援することにより、それぞれのボランティア活動の振興と社会福祉の向上に寄与することを目的としている。

- ・ 活動歴の制限を設けていないため、スタートアップ時にも応募が可能
- ・ ボランティアメンバーに人数制限を設けていないため、小規模なグループでも応募が可能
- ・ 幅広く多くのボランティアグループに助成するため、助成から再度応募するまで3年の間隔が必要
- ・ 直近10年の採択率（助成件数／応募件数）は40.9%～70.2%であり、極めて高い

〈応募資格〉

- ◎「シニアボランティア活動助成」

ボランティアグループを構成するメンバーがシニア（年齢満60歳以上）が80%以上のグループ（NPO法人含む）

◎「ビジネスパーソンボランティア活動助成」

ボランティアグループを構成するメンバーがビジネスパーソン(会社員、団体職員、公務員、経営者、個人事業主)が80%以上のグループ(NPO法人含む)

〈対象となる活動テーマ〉

- (1) 高齢者福祉に関するボランティア活動
- (2) 障がい者福祉に関するボランティア活動
- (3) こども(高校生まで)の健全な心を育てる交流ボランティア活動

オックスフォード保健福祉研修

大同生命創業100周年記念寄附事業として

2002年、大同生命が創業100周年を迎えた。その記念事業として、当財団では2006年まで「地域保健福祉国際交流助成(オックスフォード保健福祉研修)」を実施した。

その意義について、齋藤 敬理事長は『オックスフォード保健福祉研修 総括報告書2002-2006』の中でこう記している。

「地域の保健・福祉の将来を担う若い方々の海外における研修や交流を支援することにより、わが国の保健および福祉の向上に寄与することを目的に『地域保健福祉国際交流助成』(オックスフォード保健福祉研修)を実施してまいりました」



『オックスフォード保健福祉研修 総括報告書 2002-2006』

この取り組みは、2001年に大同生命より、創業100周年の記念寄附事業として、当財団において、何か地域保健福祉の向上に貢献できる事業はないかと打診されたのが始まりだった。白木 慎一常務理事が、公衆衛生の第一人者である多田羅浩三氏(大阪大学大学院教授、大同生命厚生事業団理事)を訪問し相談。地域において保健福祉に携わる若手の方々の国際交流を考えてみてはどうかとのお話をいただき、その後、大同生命の快諾を得てスタートした。オックスフォードを研修先にした理由は、イギリスが社会保障の母国であり公衆衛生の先進国であることと、オックスフォード大学に多田羅氏の長年の友人であるDr. Alex Gathererが在籍されていたことだった。

2002年5月、多田羅氏、齋藤理事長、白木常務理事が渡英し、Dr. Alexと面談して目的と希望を伝え、プログラム作成を依頼した。



Dr. Alex Gathererと多田羅氏

オックスフォード保健福祉研修の内容

研修実施期間の5年間で、全国から選ばれた計78名が渡英し、その後は、日本の保健制度などを支える有能な人材として各方面で活躍されている。応募資格は以下の通り。

- ①都道府県市町村の保健および福祉関係職員
- ②民間の保健および福祉の実務者
(都道府県・政令指定都市の保健福祉主管部長または当財団の指定する団体の長より推薦)
- ③40歳未満

帰国後は各参加者が研修内容や所感、考察を詳細にまとめた『オックスフォード保健福祉研修報告書』が2002～2006年の毎年発行され、2008年3月には前述の総括報告書が発行された。

報告書各号に記録されている研修の内容は、日本とは異なるイギリスの保健医療福祉サービスの仕組み「National Health Service (NHS)」を包括的かつ具体的に知るものとなっている。ヘルスセンター、ファミリーセンター、クリニック、コミュニティホスピタル、ホスピスなどの保健医療施設訪問や、現場のスタッフと意見交換を行った。またイギリスにおける医療保険制度、公衆衛生、看護師・保健師の職務、こどもの健康政策、在宅ケア、緩和ケア、HIVやホームレス対策などさまざまなテーマで講義・オリエンテーションが実施され、毎日のミーティングでは情報の共有とともに多田羅氏やDr. Alexの指導を受けるという、非常に充実した内容であった。

第5回(2006年)オックスフォード保健福祉研修日程表

月 日	日 程
9月8日(金)	13時 集合 大同生命大阪本社5階第2会議室 結団式 事前研修会 講義 ①イギリスの人たちが歩んできた道 多田羅浩三氏 ②イギリスの地域医療 堺市健康増進課 池田和功医長 ③イギリスの地域ケア 大阪府立大学 長野 聖講師 夕刻 リーガグランドホテルへチェックイン リーガグランドホテル泊
9日(土)	11時50分 関西空港出発(JAL421) 16時15分 ヒースロー 空港到着 夕刻 マートンカレッジ宿舎到着 マートンカレッジ泊
10日(日)	午前 マートンカレッジ セミナールームにて 通訳紹介とオリエンテーション 「オックスフォードについて、NHS(国民保健サービス)について、保健師について」など 「英国における21世紀の保健師の役割」Dr. Marjorie Talbot 午後 自由時間 マートンカレッジ泊
11日(月)	午前 保健所、病院などの施設見学 ブラックバード リーズ・ヘルスセンター、バリー ノウル・ヘルスセンター 午後 セミナールームにて 新しいNHSについてレクチャー 夕刻 歓迎レセプション マートンカレッジ泊
12日(火)	グループに分かれて各ヘルスセンターで実地研修 ヘルスビジターの実務見学と家庭訪問に参加 夕刻 ミーティング マートンカレッジ泊
13日(水)	午前 各ヘルスセンターでの実地研修 午後 日本で研修を受けた3名によるレポート Ms. Su James Ms. Francia Kilgariff Dr. Marjorie Talbot 夕刻 ミーティング マートンカレッジ泊
14日(木)	午前 アビントン・コミュニティホスピタル訪問、施設見学 午後 ヘレン&ダグラスハウス 訪問、施設見学 夕刻 ミーティング マートンカレッジ泊
15日(金)	午前 シュア スタート訪問、施設見学 午後 マートンカレッジ セミナールームにて講義 夕刻 ミーティング カンファレンスディナー(ゲストを迎えてのパーティー) マートンカレッジ泊
16日(土)	資料整理 全体ミーティング マートンカレッジ泊
17日(日)	観光コッツウォルズ、ストラトフォード＝アポン＝エイヴォン 18時55分 ヒースロー 空港出発(JAL422) 機内泊
18日(月)	14時55分 関西空港到着 解散

※上記は出発前の日程表

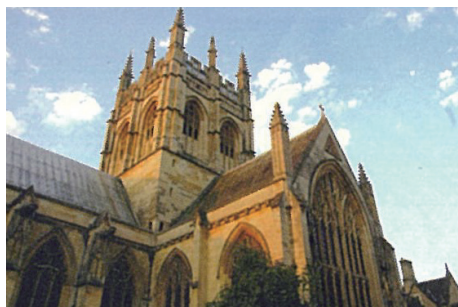
第5回研修(2006年)



事前研修での齋藤 敬 理事長



ケニントン・ヘルスセンター 訪問



オックスフォード大学 マートンカレッジ



フローレンス・ファミリーセンター 訪問



ジェリコ・ヘルスセンター 訪問



ヘレン&ダグラスハウス 訪問



バリー ノウル・ヘルスセンター 見学



シュア スタート 訪問

『オックスフォード保健福祉研修報告書』

『オックスフォード保健福祉研修報告書』には、参加者からの多方面への関心の高さがうかがえる感想が多く寄せられた。

その一例を紹介する。

「地区看護師、診療看護師、学校保健師、子供の事故防止に関する連携保健師、ホームレスの健康問題対応の保健師など、英国の看護師や保健師は専門性を持ち活動している。スペシャ

リストのため関係職種とも連携をしやすく、また仕事での経験も積むことができ、後進の指導もしやすい。日本でも看護師や保健師に一定の専門性は必要と思われる。」

「イギリスでは、ひとり一人の要求されたニーズに対してサービス内容を提供する能力は高いが、総合的に地域の住民の健康を守るという点では日本の保健師は優れていると思う。(略)自治体で働く保健師の一人として“住民ひとり一人の健康を守る”“地域を見る”という視点を忘れずにこれからの業務に役立てたいと思う。」

「輸入感染症や結核などの感染拡大予防も個々の医師の責任であるとのことだったが、この点でも、サーベイランスシステムをはじめ日本のほうが優れていると思った。(略)シュアスタートは日本では見られない事業であり、英語を話せない親とその就学前の子供、また貧しい家庭の就学前の子供を対象に、地域全体で子供の発達を促していく。国が費用を出して作った施設にPCT※や教育委員会が連携して協力し、地域のボランティアも加わって、家庭の事情で発達の遅れがちな子供をサポートする形が広がりつつあるというのは、とても素晴らしいことだと思った。」



レクチャー・ディスカッション

「友人と二人でセント・トーマス病院の敷地内にあるナイチンゲールミュージアムを訪れた。そこで見たものは研修で学んだディストリクトナース／ヘルスビジターの原点であった。(略)ナイチンゲールは病気だけに着目する当時の医療から脱却して、衛生環境に注目したり、社会的環境を整えたりすることで、病気を克服した。研修の原点を見つけ、とてもうれしかった。」

※いずれも『オックスフォード保健福祉研修総括報告書2002-2006』より

レポートのまとめとして書かれたこれらの文章には、日本とイギリスの比較を通して得た率直な感想、将来への提言ともいえる内容が含まれている。そして多田羅氏は研修の意義をこう述べている。

「イギリスも、日本も、それぞれに長い伝統の中で、それぞれ特徴のある保健活動が実践されています。しかし、実際には、ほとんど経験の交流というものが無い。その意味で、お互いに学ぶ合うための機会がもっともっとあってもいいのではないかと、というのが正直な気持ちです。今後、専門職の人たちの国際交流が飛躍的に進んでほしいと願う次第です。」



カンファレンス・ディナーパーティー

※地域における保健当局はPCT (Primary Care Trust) と言い、オックスフォード県では5つのPCTがあり、イングランド全体では303のPCTがある。

第1回研修(2002年)



東オックスフォード・ヘルスセンター 訪問



ケニントン・ヘルスセンター 訪問



コッツウォルズ観光

第2回研修(2003年)



グリーンカレッジ研修会



ブラックバード リーズ・ヘルスセンター 訪問



シュアスタート訪問

第3回研修(2004年)



ディスカッション



ベビークリニック訪問



ディナーパーティー

第4回研修(2005年)



セントアントニーズ カレッジ・ウェルカムレセプション



フローレンス・ファミリーセンター 訪問



南オックスフォード・ヘルスセンター 訪問